

あきらめない神様

[エゼキエル書 2 章 1～10 節]

彼はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている。恥知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と。彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。人の子よ、あなたはあざみと茨に押しつけられ、蠍の上に座らされても、彼らを恐れてはならない。またその言葉を恐れてはならない。彼らが反逆の家だからといって、彼らの言葉を恐れ、彼らの前にたじろいではならない。たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。彼らは反逆の家なのだ。人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞きなさい。あなたは反逆の家のように背いてはならない。口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。彼がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。

[1] 私たちを育てる神

聖書が証ししている神様は、私たちを「育てて下さる」神様だと思います。もちろん私たちは神様からご覧になれば罪人に過ぎない者だと言わざるを得ないのですけれども、そのような者をお捨てにならないどころか、人としての成長を与えようとされる神様なのだと思います。それは特に、旧約聖書という、長い歴史の文を見てゆく時によく分かるように思うのです。

今日から旧約聖書の「エゼキエル書」をご一緒に聞いてゆきたいと思います。預言者エゼキエルが神様から召命を受けた所からこの書物は始まっています。エゼキエルの時代というのは、紀元前 6 世紀、神様の愛を受けていると思っていたイスラエルの民が、バビロニア帝国によって捕囚の身になるという、イスラエルからみたら「まさか」と思うような、国家存亡の事態に陥るという大きな危機の時代でした。この「まさか」ということはたびたび襲ってきますね。私たちの具体

的な生活の中にもあるし、私たちの家族の中にもあるし、この時代であればもう2年間にもなろうとしているこのコロナ・パンデミック、感染症の拡がりの危機もあります。でも実は、私たちの人生の中で、何もないなどということはないのではないのでしょうか？「まさか」ということも含めて、この世界であり、人生だと言えると思います。人はそのような危機や試練の時に信仰を求める、神様を信じるということを「逃げ」と思うかもしれません。それは「苦しい時の神頼み」だと。でも、それはからかわれるようなことではないと思います。「逃げ」というよりも（「逃げ」でも決して悪くはないと思います）、「立ち帰り」だと思います。この試練や危機が立ち帰るべき所に立ち帰ることになるならば素晴らしいことだと思います。そうではないのでしょうか？そして、旧約聖書の預言者たちは、危機の中で「主なる神に立ち帰れ」「神はあなたを招いておられる」と、そのことを語るためだけにその生涯を捧げた人なのです。

[2] なお語りかけずにおれない神

今日は2章ですが、1章の所には、エゼキエルが見た全能なる主の幻が描かれています。途轍もない描写です。エゼキエルは筆を尽くし、描写出来ないものを描写しています。その最後の部分の所だけ見てますとこうあります。1:26 以下。

「生き物の頭上にある大空の上に、サファイアのように見える王座の形をしたものがあり、王座のようなものの上には高く人間のように見える姿をしたものがあつた。腰のように見えるところから上は、琥珀金が輝いているようにわたしには見えた。それは周りに燃えひろがる火のように見えた。腰のように見えるところから下は、火のように見え、周囲に光を放っていた。周囲に光を放つ様は、雨の日の雲に現れる虹のように見えた。これが主の栄光の姿の有様であつた。わたしはこれを見てひれ伏した。そのとき、語りかける者があつて、わたしはその声を聞いた。」

ここからエゼキエルは主の声を聞くのですね。彼は祭司の子で、自らも神と民との間の仲立ちをなす祭司でした。これまでも神殿の中で自分の務めをしていたでしょう。しかしこの時に彼は個人的に自分に語りかける主の声を聞いたのですね。2:3にこうあります。「主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている。」

よくご覧ください。「彼ら（イスラエルの民）は、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている」と、背信の事実を明らかにしているのです。それは敢えて神様を捨てる行為でありましたから、神様も「もうあなたたちのことは知らん」と匙を投げてもおかしくないのですけれども、神様はエゼキエルを、

このイスラエルの民に、なお自分の言葉を伝えるようにと遣わされるのです。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす」と。神様とはそういうお方なのですね。詩編 103 編の言葉を思い起こします。「主は憐み深く、恵みに満ち、忍耐強く、慈しみは大きい。…主はわたしたちを罪に陥れてあしらわれることなく、わたしたちの悪に従って報いられることもない」(8、10 節)

そして、このあと、随分厳しい言葉もエゼキエルは語るのですが、その厳しさというのはむしろ「帰って来なさい、わたしのもとへ」という招きなのだと思います。それがまた来週以降見てゆきたいと思いますけれども、今日の所でこういう所があります。4、5 節。「恥知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と。彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう」。「彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう」。預言者とは一面では警告者ですが、それは何と言っても、神様ご自身がご自分を民をあきらめない、決して捨てない、という思いがその預言者の姿となって具現化しているのだと思います。預言者は自分が苦しみながら、神様の熱い思いを語るのです。あなたは滅びではなく救いの内に招かれているのだ、さあ、この危機の今こそわたしのもとに立ち帰って来なさい、というそのメッセージです。そのメッセージの究極が、罪(人)の赦しです。それは、イエス・キリストの十字架という姿でハッキリとこの世界に実現したことを新約聖書は証ししています。

〔3〕 数えてみよ、主の恵み

今日の箇所は、「信仰者の自立」ということも語っていると思います。1 節をご覧ください。「『人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。』彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた」とあります。

「自分の足で立て」。正に「自立」ですね。神様との「基本的信頼」を与えられた者は、単独者として神様の前に生きることが始まります。「霊がわたしの中に入り」とありました。聖霊によって養って頂けているということですね。そして、私たちには食べ物があります。今日もこのあと主の晩餐式を執り行いますけれども、今日の所でエゼキエルに言われているものは「み言葉」ですね。8 節の後半から。「あなたは…口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」わたしが見てみると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。彼がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。」そして神様は言われるのです。3:3 にこうあります。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。」—ああ、これが「自立」なのだなと思いました。

必ずしも耳当たりのよう言葉ではないのです。「それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった」と。けれども、それを自分の頭ではなくて、体内に入れる、食する時に、それは神様の愛の言葉となって、甘美な味わいになってゆく。それで預言者は立って行ける。そうで信仰者は立って行けるのだと思います。私たちは弱い存在です。いつ神様を裏切ってしまうか分かりません。あの弟子のペトロのように。しかし、**私の内側から支えてくれるのが神様のみ言葉**なのです。私たちはどれだけみ言葉を愛しているでしょうか。愛唱の聖句があるでしょうか？ 子どもの教会学校の暗唱聖句をバカにしてはいけません。ヘンゼルとグレーテルではありませんけれども、み言葉は、私たちへの恵みのパンのひとかけらひとかけらです。それが、神様へと帰ってゆく道を示してくれます。ああ、実はあの時にも、この時にも神様の恵みはあった。み言葉を通して、それを思い起こすことがあると思います。—「わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。」

8 月は悔い改めの月ともなっています。悔い改め、つまり立ち帰りの月ですね。ただ過去の事を反省するのではなく、神様の前に、神様の言葉に立ち帰るということです。日本人としても、私個人としても。それは**神様の恵みが既に注がれているから、既にイエス・キリストによって根本的な赦しを与えられているから**出来ることです。そのためには**まず、恵みを数えてみたい**と思います。どれだけの恵みに囲まれて今の私があることか。それは、詩編 23 編で「**主の恵みと慈しみはいつもわたしを追う**」と言われているように、生涯変わらない主のお約束です。

—「**あなたは自分の足で立て**」。今日、私たち一人ひとりに語られていることではないでしょうか？ 赤ちゃんも人見知りをしてながら、心地よいことだけではなく、赤ちゃんなりに色々な葛藤を経験しながら成長していきます。私たちも、神様の前には乳飲み子です。霊の乳、み言葉という食物が私たちを造ってゆきます。困難な時代にありますが、変わらない神様の愛と助けが皆さんの上にあることを思い、今月も一緒に進んでゆきましょう。

お祈り致します。